
176話 あやつむぎ

吉川明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

176話 あやつむぎ

【Nコード】

N6157Y

【作者名】

吉川明人

【あらすじ】

わたしは織りなす綾を心を込めて紡いでいきます。

（前書き）

ある場所で「あやつむぎの会」という、新人作家さんを見つけて応援する会を発足した際の記念SSです。

繭から紡ぎ出されたこの糸は、一本一本が一つの命を守っていた。だからわたしは機を織るとき、どの命に対しても恥ずかしくないよう精いっぱい織り上げます。

さいわい町でも評判が良く、高い値で売れるため、年老いた父様と母様の三人で飢えることなく暮らしていけます。

ある年の冬。いつもわたしの反物を買ってくださる呉服問屋の旦那様から、とても良い品を手に入れたので見にくるよう知らせをいただきました。

ちょうど新しい物が一反仕上がったこともあり、わたしは半日はた織りを休んで町へと向かいました。

いつもどおり裏口から声をかけると、表の店先へ招かれて、その反物を見せられたわたしは言葉を失いました。

深紅の中にまっ白な羽が描かれた反物は、うす暗くしてある店の中で鮮やかに輝いていたのです。

「す、すごい、です」

それ以上の言葉がありません。

「そうだろう。初めて見る爺様で身なりも貧相だったが、これほどの品は見たことがない。」

おそらくどこかの金に困った公家が、下男を使って内密に売りにきたのだろう」

「手に取って見て構いませんでしょうか」

「もちろんだとも。あんたはうちに出入りする者の中で一番の品を持つてくるから、これを見せて同じほどの品を織ってもらおうと思っっているんだ」

深紅の布を手にしてじっくり見ると、初めから染め付けされた絹糸の一本ずつがこれまでわたしには想像もなかった織りかたで織り込まれています。

同じ、いいえ、格段の差があるとはいえ、同じ機を織ることを生なり業わいとしているからこそ、これがどれほど高い技術を必要とするかわかります。

これを織ったのはどんな人なのでしょうか。わたしが持ってきた反物なんて、これに比べるとまるで雑な仕事にしか見えず、独りで涙があふれてきました。

「旦那様。わたしがお持ちしたものは、恥ずかしくてお渡しできません」

「いやいや、待ちなさい。あんたのは充分に良い品だ。ただ、これが特別なだけだ」

旦那様はいつもどおりのお金で買ってくださいましたが、わたしは家に帰って機の前に座っても、何もやる気が起きませんでした。

あの品がどうしても頭から離れず、今のわたしがどんなにあがいても、同様のものすら織ることはできないのですから。

あれから三日たって、また旦那様から知らせが届きました。例の品を持ってきた爺様が新しい品を持ってきたそうです。

わたしは取るものも取り敢えず、お店に駆けつけました。

ところがそこにあつたのは、三日前と同じ深紅と羽の反物でありながら、ほんの少し輝きが失われているものだったのです。

「あんたにもわかるか。やはり、いい品から順に金に換えていくつもりなのだろう。これから先はあまり期待できないな」

旦那様は残念そうにつぶやかれ、わたしの新しい反物はまだかと尋ねられます。「いつも一定の質が保たれているのは、お客様から信用される」というのです。

ともかくまた、この爺様がこられたなら教えてほしいと頼み込んで家路へと着きました。

三日後。また爺様がきたと知らせが入り、店に駆けつけると、さらに質の落ちた反物が置かれていました。

もちろんこれでさえ、わたしに織ることはできない良質な品ですが、初めて見たあの輝きが失われていくのを見るのは忍びなくなります。

とはいえ、爺様がこられるのは三日おきということがわかってきましたので、旦那様に頼んで店番をさせてもらいながら待っていると、やはり三日後に爺様がやってきました。

取り出した反物は、ひと目見てわたしでも織れるほど質が落ちています。

爺様が帰るあとを、わたしは追いかけてきました。質が落ちたとはいえ、あれだけのものが織れる人に会える手がかりになるかもしれないのですから。

公家のお屋敷ならそう遠いところではないはずですし、わたしの足でも追えるはずです。

ところが爺様は町外れからどんどん小さな村へ向かっていきます。山に近づくほど寒さは厳しくなり、うっすらと積もっていた雪が徐々に足元を覆い隠すほどになってきます。

爺様は雪に慣れているのでしょうか。わたしはだんだん離されていきますが、なんとか小さな影を頼りに見失わないようあとを追いました。

雪深い小道をかき分けながら、貧しい家が見えてきたころ、空へ一羽の美しい鶴が舞い上がり、山の向こうへと消えていくのが見えました。

戸を叩くまでもなく、開け放された入り口の奥の部屋には爺様と婆様がいて、泣き崩れていました。

あわてて駆け寄り事情を尋ねると、二人とも混乱しているのでしよう、あらぬことを繰り返すばかりです。

水を汲んできて飲ませると、少しは落ち着いたもののガツクリと肩を落としたままでした。

わたしはひと晩泊まって、夕飯と翌朝の食事の世話をして家路へと急ぎましたが、二人の落胆ぶりは今も忘れられません。

爺様と婆様を取り乱しながら語った話……あの反物を鶴が織っていたなんて話など信じられませんが、今はただ、わたしのできる限り、織りなす綾あやに思いを込めて機を織ります。

そして、いつか初めて見たあの反物をわたしが織り上げることができたなら、もう一度二人に会いに行こうと思います。

（後書き）

興味のある方は遠慮なくお問合せください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6157y/>

176話 あやつむぎ

2011年11月18日03時11分発行